

秋空に響き渡るおどろかな音色

伝統の米多浮立

五穀豊穡を願い、2年に1度、老松神社で奉納される米多浮立。
長い年月を超え、今も人々に受け継がれる伝統の祭りに込めた思いをご紹介します。



取材協力

米多浮立保存会 会長
まつだ みき お
松田幹雄さん

378年にわたる伝統の祭り

上峰町の前牟田^{まえむた}(米多)地区では老松神社の秋季例祭に合わせ、2年に1度米多浮立を奉納しています。

^{やまもとけいんぱ}山本玄蕃が雨乞い祈願のために仕立てたものが、寛永18(1641)年に前牟田地区に伝わったのが祭りの起源とされています。三百七十余年経った今は10月25日に近い土・日曜日に行われ、今年は10月26日(土)・27日(日)に開催されました。

浮立には総勢約100人以上が参加し、地区が総出となって盛り上げます。

幼児から演目に出るようになり、年齢が上がると共にいろいろな役割を担います。

祭りの花形は黒装束を身にまとい、高さが約2m40cmもある三日月型の天衝^{てんつ}を頭上にのせて力強く舞う「天衝舞」です。

「龍を表す天衝には、龍と、真ん中に宝珠(＝星)・太陽・月が描かれています。雨を降らせる龍を喜ばせたかったのでしょう。重さ5kgもある天衝を紐一本でしっかり締め上げ、3人が呼吸を合わせ、境内を飛び跳ねるように舞います」と松田会長は話します。



脈々と伝統を伝える

米多浮立保存会では浮立の保存と継承のために浮立の練習や道具の修理など、祭りの準備を支えています。浮立の練習は本番の1か月前から始め、人から人へと口伝えで受け継いできました。

松田会長は「奉

納は2年に1度です

が、子どもの頃からずっと携わっているので、所作が体に染み込み、忘れるということはないですね。また、浮立には出なくても、教えに来てくれる人たちがいるおかげでしっかりと受け継がれています」と笑顔で話します。

少子化のために祭りに出る人を集めるのも大変ですが、地域の団結で受け継いできました。

さらに保存会では子どもたちへの継承のために、平成27年のお旅所の落成に合わせ、奉納がない年に「子ども米多浮立」を始めました。子ども用の小さい天衝や鉦、太鼓などを用意し、幼児と小中学生で構成し、天衝舞は中学生が舞います。

「せっかく子どもたちが頑張ってくれるので、なるべく多くの人に見てもらえる機会に行っています。おかげで浮立を毎年繋げられるようになりました。子どもたちにも、米多浮立の時は、どこにいても駆けつけたくなる、みんなのふるさにとしたいですね」と微笑みます。

人と地域を繋ぐ米多浮立。今年もたくさんさんの笑顔に包まれ、幕を閉じました。

「問い合わせ」 教育委員会文化課 文化係

☎ 5214934 (ふるさと学館内)

